特集1 地域遺産が人を引き寄せる「レトロ」でまちおこし

時代の変遷とともに地域に残された古いまち並みや建物を保護・整備し、新たな観光資源として再活用することでにぎわいを取り戻したまちがある。一度は、忘れ去られようとしていた地域の遺産はいかにしてよみがえったのか……。各地の商工会議所や商店街の取り組みをリポートする。

「こみせ」という歴史的資源を生かしまちづくりと人づくりを進めていく

こみせ通り商店街

青森県黒石市

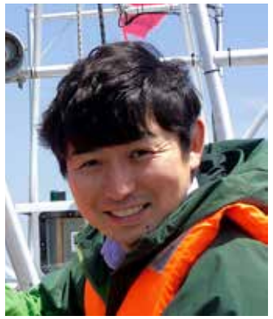
青森県の中央にあり、東に八甲田山、西に〝津軽富士〟と呼ばれる岩木山を望む黒石市に、江戸時代から続く古いまち並みのこみせ通り商店街がある。ここには日本最古ともいわれる木造のアーケード「こみせ」（小見世）が今も残る。地元の商店主たちが中心となり、その歴史的遺産を生かした古くて新しい商店街づくりを進め、まちを活性化しようとしている。

まちの誇りを次世代へ残していく

黒石市の歴史は今から約360年前の明暦2（1656）年に、弘前藩の津軽信英（のぶふさ）が藩から5千石の分知（領地の分割相続）を受け、黒石津軽家を創立して移り住んできたことから始まる。信英が以前からの町並みに新しいまち割り（まちの区画）を行った際、それに合わせて商人町に「こみせ」がつくられたのだという。

「こみせ」とは、雪よけのために建物の通り沿いにひさし状の屋根を設置してその下を通路としたもの。同じ雪国である新潟県にも「雁木（がんぎ）」と呼ばれる同様のものがある。黒石のこみせは江戸時代の最盛期には全長4・8㎞にも及び、通り沿いの商店やそこを通る住民にとって、なくてはならないものとなっていた。

こみせは1階の屋根の高さにひさしがつくられ、その下に商店の入り口がある



こみせ通り商店街振興組合の理事長・村上陽心さんは和風レストラン・御幸の店長。昨年、33歳という若さで理事長に就任した。「それまでの10年にわたる商店街の活動への貢献が認められてのバトンタッチでした」

「それから黒石は宿場町として発展し、昭和の高度成長期には隣の弘前市より商業的に栄えていたほどでした。こみせは明治時代の大火や道路の拡張、建物の取り壊しなどで減ってしまいましたが、それでもこみせはまちの誇りであり、今あるところだけでも残していこうと商店街全体で努力しているところです」と、こみせ通り商店街振興組合の理事長である村上陽心さんは言う。

かつては人通りも多いにぎやかな商店街だったこみせ通りだが、高度成長期とともに車社会の時代が訪れ、人の流れが徐々に変わっていってしまった。交通アクセスが良くなり、車で隣の弘前まで行ってしまう人が増えたのだ。さらに大きな影響を与えたのが、昭和61年に郊外に大型ショッピングセンターができたことだった。

「それまでは商店街にゲームセンターや小さなデパートもあり、みんなそこに行っていたのですが、郊外に大型店ができてからは、商店街の人たちでさえ、そちらに行くようになってしまいました。僕も小さいころは友だちとよく遊びに行っていましたから」と村上さんは笑う。